

# 白金葎

3月号



平成29年3月発行

第73号

白金葎定例会句会案内

四月二十一日(金) 〃 第五 兼題…霞草、啄木忌

五月十九日(金) 〃 第五 兼題…新茶、雛髷栗

六月十六日(金) アビスタ第四 兼題…翡翠、黒鯛

兼題句参考句(四月二十一日分) 霞草、啄木忌

あくびしていでし泪や啄木忌

うとうつと夜汽車にありぬ啄木忌

ひところのわれをかへりみ啄木忌

便所より青空見えて啄木忌

啄木忌いくたび職を替へてもや

啄木忌さみしくなりて逆立す

病室を移る旅情や啄木忌

啄木忌五円切手を貼りました

反り合はぬ花のなきかに霞草

かすみ草と霞・法華滅罪之寺

かすみ草仕事の休み貰ひけり

セロファンの中の幸せかすみ草

乳母車通ればそよぐ霞草

脇役にひたすら徹しかすみ草

霞草父親学級椅子浅し

霞草紙人形も二重帯

木下夕爾

藤田湘子

桂信子

寺山修司

安住敦

吉田未灰

千葉浅沙男

関戸美智子

佐藤博美

阿部完市

鈴木しげを

椎名智恵子

石原八束

藤井恒子

細川加賀

花谷和子

月例会句会報(17/3/17 11名欠1 東風、涅槃)

飯田孝三

横綱とあり一捌き春の塩

子等よりもショートスカート春三番

手賀沼やひかり満面東風の坂

ぼつちりと蕾四五六涅槃寺

梅東風や麒麟の首とスカイツリーと

増田陽一

殖えすぎし鹿は喰ふべし安房七溪

涅槃図に蛙は居たり居なかつたり

利根水系彷徨ふ去年の迷ひ鮭

「不要捕捉野鳥」と札や囀れる

夕東風や瘤白鳥のはや眠し

光成高志

金棒を放り赤鬼涅槃哭く

竜王は舌を長出し涅槃哭く

火の車の手もあり阿修羅涅槃哭く

杉花粉蒸気機関車煙吐く

刈られたる東風の茶畑かがやけり

目鼻なき和紙の雛の前を向く

涅槃会の花供御はなぐそという豆を買ふ

涅槃哭く気絶の僧の横たはる

どこの子も胸を括られ東風の街

夕東風や胡麻跳ねるまで炒つてをり

又巻かれゆくなり涅槃変のまま

みな若くみな鬼籍なり春の夢

東風の旗に振られて征きし日がありぬ

居残るは連衆ばかりの涅槃かな

声あげて東風に乗つたる鳶若く

招かれし老女三人雛祭

光  
みち

すしめしを一気にさます春一番

東風吹くや天満宮の太鼓橋

涅槃図を村のはずれの寺に見る

春嵐びたりと止みて夜の明けり

春の夢草間弥生に魂抜かれ

老いてなお親友のあり桜餅

春時雨木札一枚巴塚

朝東風やきのふはきのふけふはけふ

春の雷四つ身の柄に戦闘機

荒東風は畑の土をまき上げて

涅槃像香の煙に包まれる

強東風に梅の花びら散り敷かる

うららかや小さくなりし母と歩む

玉仏寺白玉石の涅槃像

吉羽多美子

松村幸一

倉田紀子

浅野正美

武者昭七

東風かぜに乗りて優遊百合鴉

青木啓泰

涅槃西風海の碧さの日ごと濃く  
北帰行翼休めて北の河

東風吹くも吹かぬも東方見聞録

東風吹いて海鮮やかに藍となる

杉花粉山から天狗が飛んでくる

茜雲涅槃の絵図の輝けり

白い物盗む癖あり寒鴉

春泥を跳ばして学童道いそぐ

消えてゆく野焼の煙が目にしみる

磯目健二

側溝にいの一番に菜が咲けり

光成高志

御仏は切れ長の目を閉じ逝きませり  
寝姿の涅槃に似たる炬燵かな

東風吹きて沼ひろびろと鷗一羽

涅槃西風海の碧さの日ごと濃く  
昭七  
今日は彼岸、涅槃西風がそよそよ吹き、前方の干拓

一文字に目と口を閉じ涅槃かな

田には霞が張っている。アピスタに行つて図書の延長

東風運ぶ梅の香と行く野道かな

をして帰り、夕方田中の道を犬を走らせていると紅玉

佐藤宏之助

の日輪がある。富士の方角の春没日である。掲句を改

植物園甘草の芽を柵圍

めて読んでこれが鎌倉であつたなと思つた。地霊と

小走りを止めて囀る黄鶺鴒

いう言葉があるが、鎌倉の悲哀に満ちた歴史と風土を

綱打ちのころころ春の遠からじ

思うといつもものあわれが私の胸を突く。日ごと濃

涅槃哭く迦陵頻伽は尾を立てて

くて日本史のあわれに思いをいたされたのではなかる

うか。「日ごと濃く」の措辞に往時の生活が思われた。

## 東風吹くや天満宮の太鼓橋

多美子

「東風吹くや」の上五は東風の吹く様を切字で切っており、その間まに季感溢るる空間がひろがる。天満宮の太鼓橋という具象から東風吹くころの天満宮の他の物や佇まいが目に浮かぶ。私は亀戸天満宮や大宰府天満宮を思い浮かべた。更に住吉神社の反りの強い反橋を思い出して掲句を味わった。

## 涅槃哭く迦陵頻伽は尾を立てて

宏之助

涅槃の兼題を出した手前、もう一度涅槃図を拝んでおかねばならぬと思ひ、京都の泉涌寺に行きたかったが、遠方なので、関東のお寺さんをネットで探し、江戸川区の感應寺の涅槃図にまみえることが出来た。釈迦の涅槃に慟哭する菩薩や仏弟子会衆や動物に到るまで描かれている絵が涅槃図であるが、「天狼」の遠星集作家らによってミミズに到るまで詠み尽くされているので、私は新しい物をと注意深く見させて頂いた。井上住職のお陰であります。掲句は人頭鳥身の迦陵頻伽は尾を立てて哭いているというのである。極楽浄土から駆けつけた迦陵頻伽は尾を立てて美しい声で哭いているに違いない。源氏物語にも舞があつた。

## どこの子も胸に括られ東風の街

みち

私たちの小さい頃は皆子はおんぶされていた。おしんのテレビドラマで子をおんぶして奉公する姿は懐かし

かった。現代はなぜかみな子を胸の前に抱く紐で括れる。東風の吹く街角で見かける現代風俗。

一句鑑賞

磯目健二

## 招かれし老女三人雛祭

多美子

たとえば「細雪」の後日光景。大阪船場の旧家、外へ嫁いだ三人に声をかけて四姉妹集まり雛壇の前で談笑している。老いてもそれぞれの容色は衰えずむしろ熟女の温雅さを増している。端麗な雛人形ともども桃の部屋は艶治に花やいだ雰囲気に満ちている。

## 金棒を放り赤鬼涅槃哭く

高志

この世の終わりとみな嘆く愁嘆場の絶頂で、勇猛な赤鬼までもが大事な金棒を放り投げ徒手空拳を突き上げ慟哭せずには居られない。仏滅の悲嘆ぶりを喜劇的景を捉えることで描き出す俳諧味が秀逸。

## 手賀沼やひかり満面東風の坂

孝三

我孫子は南北手賀沼を圍繞する丘陵地に発達した町で、数多い坂と谷津のすべてが手賀沼へ向いている。どの坂を下っても春光漲る沼が目の前に広がる。今年もまた東風の季節。春の到来を坂を吹いてくる風に実感するのである。

## 東風の旗に振られて征きし日がありぬ

幸一

今も忘れ得ない青春の一日から茫々七十年余過ぎて

いる。その日も今日のように東風が吹いていた。万歳万歳の声と日章旗に送られて出征したが、戦況悪化の中、生還は考えられなかった。未来への絶望という断腸の思いを心の底へ必死に押し込めた一日の記憶がありありと甦る。

### 杉花粉山から天狗が飛んでくる

啓泰

どどどつと山嵐だ。まるで天狗の大団扇に煽がれたように、風に乗って花盛りの杉林から花粉が人里へ襲ってくる。宮沢賢治の童話の世界を連想させるメルヘン風の句だが、詠んでいるのは花粉症患者にとってやりきれない自然災害だ。豪雨中止を八大竜王に必死に祈願した実朝の気持ち共感できる。

### 涅槃図を村のはづれの寺に見る

多美子

「花すすき寺あればこそ鉦が鳴る」という來山の句にあるような村外れの侘しい寺での年一回の涅槃図開帳。普段は足遠い村人も山門をくぐって法会に参じ、寺宝の涅槃図を拝観する。この日は村人に春の始まりが告げられ、明日からは農事の準備が始まる。仏との別れは復活祭でもあるのだ。

### 東風吹いて海鮮やかに藍となる

昭七

作者の他の投句「涅槃西風海の碧さの日ごと濃く」もいいが、日を特定しないで吹く東風の膨らみのある季節感でこの句のほうを採った。湘南鎌倉の海とのこ

とだが、黒潮が強まる日差しのかなか相模灘沖から黒潮の蛇行が近寄り、やがては「初鱈はるかな沖の縞を着て」（洪谷道）の季節となる。印象派の絵を見るような佳句である。

### 一句鑑賞

武者昭七

### みな若くみな鬼籍なり春の夢

幸一

三好達治の詩「草千里浜」の一節に言う。「若き日のわれの希望（のぞみ）と二十年（はたとせ）の月日と 友と われをおきていづちゆきけん・・」と。「死者はいつまでも若い」と言ったのはだれであったか。「おれもおつつけ行くからな」とはだれの吊辞であったか。ぼくらの一生はまこと「春の夢」にも似てはかない。こころに沁みる句だ。

### 金棒を放り赤鬼涅槃哭く

高志

### 涅槃哭く気絶の僧の横たはる

みち

一句目。鬼の目にも涙というけれど鬼だって、商売道具の金棒放り出してまで大声をあげて泣くことがあるのだと作者はしみじみと涅槃図を眺めている。二句目のお坊さんは（余計なことだけれど）なんで「気絶」してしまったのだろう。号泣のあまりなのか、息せきってかけつけたせいなのか。号泣する衆生をよそに一人気絶して長々横たわるお坊さんの寝姿に僕は何か親

しみやら滑稽やらを感じて微笑んでしまうのだ。しかし氣絶とはおおげさな。作者の余裕の目のせいだろう。寝姿の涅槃に似たる炬燵かな

健二

炬燵に足入れて長々寝そべるひと時はまさに極楽だ。おりから涅槃会の時節。ふと涅槃についた釈迦の寝姿が思い浮かぶ。お釈迦様の寝姿はこんな格好だったかななどと考えているうちにやすらかに寝入って。この世の極楽はこころも形も釈迦の涅槃に通じている。

老いてなお親友のあり桜餅

紀子

茶飲み友達などというけれど、老いて後まで親友と呼べる人がいるのは幸せだ。その幸せは桜餅のほのかな甘さと紅の色に通じている。その喜びが句のリズムにおどっている。

うららかや小さくなりし母と歩む

正美

背丈の縮んでしまうのは仕方がないと思いつつはりさびしい。うららかな春光がそんな悲しみをやさしくつつんでくれる。その嬉しき。

一句鑑賞

飯田孝三

春の夢草間弥生に魂抜かれ

紀子

「ご存じ」水玉」の草間弥生先生、滞米、若き前衛女流（失礼）騎手も、今や文化受賞の重鎮。大小、幾千幾万の水玉の浮揚感とおはこ「南瓜」の圧巻の存在感

は、無垢、充実の対照よろしく、見目艶やかに蠱惑、深淵、人は恍惚の境に「魂抜かれ」る。終辞けれんなく、蕉門のかるみに通い、水玉のコスモスは「春の夢」さながら。名は体を現す、草間弥生は云い得て妙。

又巻かれゆくなり涅槃変のまま

幸一

冒頭「又」が「ゆくなり」と相呼応、つくづく抱懐が深い。さて、法会終えれば、国宝重文、各地の名刹古寺に伝わる涅槃図は、蹲る象の巨体も五百羅漢の悲嘆の顎も、衆生の叫喚諸共に絵図に巻き戻され、年々庫裡の奥深く仕舞われる。く「まま巻かれ」と返る詠唱は、六道輪廻にも適い巧まず手練。とまれ寡聞、永劫解脱の教程を弁えず、余言慎むに如かず。

涅槃会の花供御はななくそと、いう豆を買ふ

みち

花供御の読みが「はなくそ」とは恐れ入る、黒豆の一種とのこと。いわずもがな涅槃会の御献物のひとつ。く「という」と嘯く、そらとぼけが、「豆を買ふ」の素つ気なさと相乗り、ほのぼの飄逸。上質のエスプリが小気味よく、御尊顔の涅槃は思わず微笑、悲嘆の淵の衆生もふとわれに返るかも。いやはや今年の涅槃会は暖か、肌汗醸す日和だったなあ。

玉仏寺白玉石の涅槃像

正美

不明、「玉仏寺」を知らなかった。上海の名刹の由、「白玉石」は白瑪瑙。さて涅槃像はどれも凡そ美形、

白哲。羅漢、百獸の嗚咽、叫喚の囀に横たわるおん姿が、眼前、いと際やかに浮かびくるのだ。白瑪瑙の由来、産地のほどは詳らかにしないが、仏教伝来の「天路歷程」に遠く思いを馳せずにはいらねない。

「不要捕捉野鳥」と札や囀れる

陽一

はて安房、上総はどこの森だろう、明るい日射しに「治外法権」の春を謳歌する百鳥の囀りが溢れる。けれど、軽い「札や」の軽みと「囀れる」の円みは、うらら瑠璃色の囀りそのもの。出だし「不要捕捉野鳥」の重々しさがめでたさを止揚して面白い。さらなる御託は耳を汚すのみ、宣々。

杉花粉山から天狗が飛んでくる

啓泰

上空から天狗のくしゃみが聞こえる。ご自慢の超隆鼻、猖獗しょうけつを極める花粉症の恰好の標的を免れない。あらあら、又々はつくしよん。いくら飛んでも、お気の毒、村も町場も花粉の渦。はてはて天狗どうすんべ。御免、ついつい駄弁。く飛んで「くる」が目玉、天狗の飛びざまをまざと見せるのだ。

一句鑑賞

増田陽一

みな若くみな鬼籍なり春の夢

幸一

想い見れば記憶にある親しい人々の多くが故人ではないか。しかしこれは春の夢である。自分が長生きし

たのは幸いだっただけで、かわりにこんな辛い感慨もあるのだ。『人生ただ春の夢の如し。』の短歌的情緒をも連想させながら、夢に『みな若くみな鬼籍』だったと断定する春は切ない。俳句形式の短さが巧妙に生かされ『鬼籍』の語がどこか断絶を感じさせてなお切ない。掲句とは少し外れるけれど、立派な仕事を遺した方が四十代で亡くなる例は数多ある。僕もそれほど長生きしたわけではないけれど、一体オレは何をしてきたのだろう、とよく想うこの頃である。

涅槃西風海の碧さの日ごと濃く

昭七

涅槃会の頃吹く風、西方浄土からの風とも言う。春の寒さが消え、海の色が濃さをましてくる、と言うのも近くに住んで何時も海を見ている、という恵まれた環境でこそ判る季節。『日ごと濃く』の推移感に胸打たれる。

杉花粉蒸気機関車煙吐く

高志

戦後、日本の山は広葉樹、落葉樹を伐採してやたらに杉を植えた。本来の自然の植生を無視した採算本位の仕業であった。いま濛々と春の杉花粉が都市を襲う。その杉の植林を分けて行く蒸気機関車の煙がまた時代遅れの郷愁を誘う、という鮮やかなこの対照。

子等よりもショートスカート春三番

孝三

若いお母さんが連れた子供のそれよりも短いスカ―



トであろうか、春風に裾をなびかせながら。春一番では、風が強すぎてスカートがめくれ頭までかぶさってしまう。三番位で丁度良い具合に春の日を浴びた女ざかりを見せる情景。「シヨート」の一語が上下にかかる旨さもあり。

### どこの子も胸に括られ東風の街

みち

昔、子供はみな背中に「おんぶ」したのが近年はそれを前に廻したかたちで胸に括るようになったのは良く見るけれど、掲句のように改めて見直した表現に何かおかしみがあつて、目新しく春先の街が見えてくる。

### 東風吹くや天満宮の太鼓橋

多美子

幼年時、大きな太鼓橋を仰いだ記憶がある。それは大阪の住吉神社だったけれど、渡っている男女が天空を歩いているようで、自分は恐くて渡れなかった。掲句は道真の歌の連想もあり、『天満宮』『太鼓橋』という大きな丸みのある語の連続によって豊かな春を感じさせるのである。

### 寝姿の涅槃に似たる炬燵かな

健二

炬燵の周りを囲んで寝ている。『涅槃』は「煩惱を絶つて絶対的な静寂に達した、仏教における理想の境地」であるからこの家族団欒の春炬燵こそ涅槃である。また「寝姿の」と、この光景を見ている眼があり、真ん

中の炬燵を入滅の釈迦に見立てた涅槃図を連想して滑稽味あり、語のリズムも生かされた好句でしょう。

### 白い物盗む癖あり寒鴉

啓泰

鴉は好奇心旺盛で、好みのオブジェを蒐集する性質があり、スプーンなど金属のこともある。鴉の性質を断定して特色ある句。當巢なら或いは「春鴉」か、とも思う。

### 春の夢草間弥生に魂抜かれ

紀子

草間女史に見せたら喜ぶであろう。嘗てのニューヨークで必死の前衛作家が、円熟して本国で大暴れしているのはめでたい。先日、私も驚嘆して拝見しました。

### 植物園甘草の芽を柵圍

宏之助

甘草は生薬として鎮痛、鎮咳剤に使われ、また甘味の成分となる。ここは素朴な自然植物園で、他にも芽を出しかけた植物は多いけれど、作者は甘草の芽が大切に囲われている園のかたちに興味を持ったのである。麗らかや小さくなりし母と歩む

正美

年老いて元気な母と娘の幸せな散歩。麗らかな春光の下と言うのどかさ。この主題にはどうしても既視感が出るけれど「麗らかや」で心地よい句となっている。

### 俳窓評論纂

\*うたをよむ 永末恵子氏没後一年（投稿 竹中宏）が

朝日の三月俳壇歌壇中央欄に載った。六二才で急逝して一年、俳歴は三十年に満たなかつたが、「火の後ろふいに二月の蓮畑」「青葙原あまりのことに生まれけり」「松風を刺身と思ふ女かな」「つらゆきを枕に枯れてゆくのだな」などの句がある4冊の句集を残した。読後ふと、透明な空気の波動のような気配だけが手元に残され、それ以上の何を読んだのでもなかつたと思わされる。作者の求めるものも、それだったのだろう。確かな何かを手づかみにしようとする大方の俳句と異なる志向といえる。氏は「行きて帰る心」を俳句の要諦としてよく口にした。これも三冊子の中に伝わる芭蕉の語である。当然ながら、創作は永遠の静止状態からは生じない。(この評論はかなり難しい。レジグナチオンという独語があるそうであるが、故吉野俊彦氏はこれをあきらめの哲学と称した。右の俳句を読むとこの人は己を早くからあきらめて主張をしないと決めたのだらうと思つた。)

\*陽一さんから貰つた小熊座2月号に「鬼房の秀作を読む」(78)がある。不二男忌や時計ばかりがコチコチと(平成13年愛痛きまで)を二人書いておられる。一人は鳥わたるこきこきと罐切ればを連想されての句である、もう一人の方は、不二男から鬼房への形見としての時計ではないだろうかと、想像されている。

(秋元不二男は宏之助さんの初師であり、天狼創刊に西東三鬼

とともに尽力された有名な俳人である。ここで私如きが書くのも憚れる偉い人である。子を殴ちし の句も好きだが、私が一番驚いたのは 人工肛門のおなら優しき師走かな であり、上五にはオストミーとルビで読むのだから、ここまでの境地になつた方である。孝三さんの喇叭水仙の句にも思いが至つた。)

\*先月書いた話題アニメ映画を観た。この時代の「この世界の片隅に」である。原爆ものをたくさん観て来た私は感動しなかつた。むしろ、協力者の名前が画面いっぱい長々映されていたのに感動した。二月25日のBe版にこの映画のことが詳しく載つた。3月に入つて折々のことばに 大ごとじゃつた の三連節に驚田清一の解説が載つた。気がつけば、時代は悪いほう、悪いほうへ流されている云々。

句集「走馬燈」を読んで

飯田孝三

句集『走馬燈』(杉山マサ子)をいただいた。昨年十二月に上木された、正美さんのお母さんの句集である。七十歳を過ぎて俳句を始められた、平成九年から二十年にわたる作品を年次に収録する。句集の成り立ちと著者の人となりについては、高志さんがつとに紹介されている(70号)。目を瞠り、心に染みる諸作より紙幅のかぎり挙げてみたい。

日盛りの草引き汗の目に痛し

(平成九年)

荒川を渡る雁見し千住駅

春立つや訪問看護待ちてをり

花冷えや雨の街灯日本橋

原爆忌鬼灯の種出してをり

まゆはきの月の残りて寒日和

風鈴市二回りして一つ買ひ

立冬や野武士の如く鯉およく

主なき上段の靴十二月

鬼灯の綱目のなかをのぞきけり

睡蓮の下より鯉の湧き出づる

うたた寝に亡夫の声する春炬燵

水草に泡の湧き立つ大暑かな

夜桜に程良き風の出でにけり

芭蕉布に合ふ帯さがす更衣

足るを知る土用蛭の熱き汁

孫七人曾孫一人龍の玉

子規庵の糸瓜したたか二十本

裁板に祖母の篋あと一葉忌

葱坊主予報通りの午後雨

新蕎麦や芝大門の更科に

画廊の多き銀座裏

数かぞへ浮くを待ちをり鳩

五人目の孫の縁談菊日和

(平成十年)

(平成十一年)

(平成十二年)

(平成十三年)

(平成十四年)

(平成十五年)

(平成十六年)

(平成十七年)

(平成十八年)

(平成十九年)

七夕や子等の願ひをのぞき見る

実千両孫の縁談整ひぬ

産土へ道一筋や桑熟るる

つくばいに水飲む雀日の盛り

ビル群の中の校庭桜咲く

杉板の塀に節浮く残暑かな

競馬場の道の両側柵の花

急がずに此の道を行く師走かな

菩提樹の箒目美しき青薄

淑気かな注連縄太き夫婦楠

観覧車遠くに光り日脚のぶ

朝市や大根の山土匂ふ

四人の子此のねんねこに育ちたり

大笹に干す切干の良く渴き

遠山のと動めく二月かな

門前に春火桶置き煎餅屋

中位とは此の位老いの春

まづ、句歴の初っぱなから目白押しの佳什に驚く。

力まず飾らず、季語はじめ言葉が一つ一つ息づいてい

る。やさしく深く、調べ自ずから滑らかだ。なにしろ

全六百十七句から僅かに選んだので、句境の一部しか

伝えられないのが残念だが、まるまる昭和から平成に

かけての、様々な時代を弛まず生きてこられた、日本

(平成二十年)

(平成二十一年)

(平成二十三年)

(平成二十四年)

(平成二十五年)

(平成二十六年)

(平成二十七年)

(平成二十八年)

の母が目には浮かぶ。

(平成 29・03・16)

受贈誌 (H 29 年 3 月号)

寒戻り佐保姫息を綯交せて (彩 133 号)

平野ひろし

畦踏めば畦のやはらか木の芽雨 (〃)

〃

屋敷神祀る庭ぢゆう露の臺 (〃)

〃

やはらかき少女の鎖骨ミモザ咲く (おか 3 月号)

野木桃花

初雪を雫と落し柿葺き (〃)

山尾かづひろ

池の面を走りて梅の風となる (東京ク 3 月)

理佳江

パチンコ店新装開店昼蛙 (〃)

武子

蕨餅提げて友訪ふ昼下がり (〃)

文男

納税期はじめて記すマイナンバー (〃)

璃子

春の雲鳶平然と梁歩く (〃)

守啓

鳶職は梁をすたく春の雲 としてはいかが。

こだま

山尾かづひろ吟行ノート (H 29・03・03)

春塵の一駅戻る医者通ひ

飯田孝三

雛飾る末ッ子は手づくり卵雛

〃

漢字表に芯の加はる牡丹の芽

光 みち

春日射す靴の汚れをはづかしむ

〃

蠟梅が真つ黄に咲いて曇空

光成高志

黒髪の乱れに群るゝ胡麻斑蝶

〃

賢治童話 やまなし

武者昭七

「やまなし」の出だしは明るく軽快です。谷川の底の二匹の蟹の兄弟の会話からそれは始まります。

「クランポンはわらったよ」「クランポンはかぶかぶわらったよ」「クランポンは跳ねてわらったよ」「クランポンはかぶかぶわらったよ」・クランポンとはなんなのか、誰なのかなんの説明もないままに何度も何度も繰り返されるけれど気にならない。軽快で明るいリズムがなんとも楽しく読み手はそれに惹かれてしまう。

それはおそらく兄弟の口から吐き出される泡か水底が吹き上げる泡なのでしょう。それが夢のようにゆらゆらと立ち昇り、はじめて消えるさまを兄弟は楽しんでるのです。ここには「流れに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びひさしくとどまりたるためしなし」というような古典的な陰湿さはない。「クランポンは死んだよ」「クランポンは殺されたよ」・・・というような深刻なせりふさえも笑い飛ばされてしまうのです。

そんな水中に暗い影を落とすのが兄弟の周りを泳ぎ回る一匹の魚です。「お魚はなぜあへ行ったり来たりするの」という問いに兄さん蟹が応える言葉は「なにか悪いことをしているんだよ。とつてるんだよ。」です。実はお魚は水中の生き物を餌として呑み込んでいるの

です。殺生の罪です。しかし事件はこれで終わらない。かわせみのコンパスのように黒くどがったくちばしが突然おそいかかり魚の白い腹がぎつらと光っていつぱんひるがえり上のほうのぼつたと見るや魚の姿はそこになく何事もなかったように泡はつぶつぶ流れ光の網はゆらゆらゆれているのでした。「お魚はどこへ行つたの」という問いに「こわいところへ行つた」としかお父さん蟹はいいません。さつきまですぐ近くを大きな口をあいて泳ぎ廻っていた隣人が突然なものにかに「怖いところ」に連れ去られ影も形もないのです。

「こわいよお父さん」兄弟はお父さんにすがりつきます。他者の命を食べ、食べられるという生き物の世界の残酷さを兄弟は初めて目の前に見たのです。しかし修羅のあとに水面を滑っていくたくさんの白い樺の花びらを寫すことを作者は忘れません。

やまなしの第二編は夏が去り秋を迎えた同じ蟹の一家です。蟹の兄弟ももうよほど大きくなりましたが持ち前の陽気さは失いませぬ。あいかわらずあわの大きさに比べ夢中です。そんな兄弟を驚かしたものは枝から落ちてきた円いおおきなやまなしです。やまなしはいいにおいをいっぱいふりまきながら谷を流れていきます。一家はやまなしのあとを追います。やまなしは木の枝に引っかかるとまわりお父さんは「おいしそう

だね」という子供たちを制してもう二日ばかり待て」といいます。二日の間にやまなしはいい具合に熟しておいしいお酒ができるからというのです。いい匂いの中を三匹は満足して自分の穴に帰って行きました。二日あとを楽しみにしているにちがいません。これでお話はおわりです。

第一篇は一見平和な暮らしの裏側に潜む恐怖と死のかけを、第二編はたとえそれが束の間のものであるにせよ暮らしの希望と悦楽を語ります。そんな危うい二つのもののあいだを生きているのが僕らの「いのち」というもののように思えます。

賢治は「わたしの感じないちがった空間に／いままでここにあった現象がうつる／それはあんまりさびしいことだ／（そのさびしいものを死というのだ）」とうたっています（春の修羅一噴火湾）。賢治にとつて死は異次元世界への空間移動なのです。お魚の最期の様子はそんな死のかたちをよくつたえていようです。

(二〇一六・九・一三)

お便り広場（到着順、敬称略）

前略二月になったと思つたらもう終わりになりそう。何事もなく暮らせる事に感謝しながらがんばっています。峯子は車で時々来て話して帰ります。私は自分で

は動けないのでどこにも行けないと自分で考えて居たけど、高志さんのハガキを読み少しでも私に出来る事をしなければと思いました。健兄にも長い間会ってないです。皆さんから常に自分の足もとを見て行けと云われそれが身につけて自分の事ばかりに生きて来たのでこれからは少し誰かのためにもがんばる自分になりたいです。廣本さんに見せましたよ。すばらしいですねと、奥様が返して下さいました。お身体だけは大切にね。

(223) 幸子

句会毎回楽しく出席させて頂いています。有り難うございます。72号には何と二十年も前(！)の拙いエッセイが載っていて、びっくりするやら恥ずかしいやら複雑な感じでした。この間の大火であの辺りは？など心配です。文末の「鼻白んで・・」というのは、それまでの「孤高の詩人」という蕪村のイメージにそぐわない感じがしたためです。和漢朗詠集慶滋保胤の詩句が出典とその時知りました。選句欄の省略はすつきりした感じでいいと思いました。得票の数はその句の下にというのはどうでしょう。俳誌としての出発というお考え素晴らしい。いよいよのご発展を祈ります。みち様にもよろしく。お大事に。

(227) 昭七

ようやく春めいてきました。今日はこちらは雪が舞っています。白金葎届きました。あまりお知らせする

ようなニュースもありませんが今年はずか私にとつて訃報が多くて大変だ。徳田の佐藤進さんが享年92才で亡くなった。ゴルフの友人や年金友の会の友人が若くして亡くなった。私はまあ元気でゴルフや野菜作りの準備などしています。高志も変わりなく元気であることとお察し致します。心にゆとりをもってゆつくりとゆつくりと。寺めぐり坂をのぼりて瀬戸の海

スタンプめぐりをしたがちよっときつかった。(39) 健三  
尾道の寺を巡りぬ春の海(みち添削)

雛納めもお済みでしょうか。気温の乱れもいま暫くのことと存じますがお障りありませんか。御誌二月号頂いてから、何やかやとある上に怠け心がわざわいし失礼しておりました。政治家のお好きな事案が多く世界的なことが増えてきましたね。信じられないことばかりです。私共の句会では三月兼題、蛙です。我孫子市は田とか沼が又池や農業用水とかあるように思い蛙の声など聞こえるのでは、と羨ましく思います。お大切にお過ごし下さいませ。ごきげんよう。(311) 璃子

(我が家は雛人形を内裏様と官女雛のみ残して人形供養に出しました。雛出し雛納め、しんどくなるもんですね。蛙のことなどその通りです。前方に沼干拓田が広がっており、利根川への手賀川には水禽がいつもいます。沢潟やつひの栖は水の郷(みち)の句を思いつゝ過ごしております。高志)

桜が咲き洩つておりますが近くの神社の河津桜は花期が長くまだ美しさを保っております。俳句は独学で一人楽しむこともできますが、句会に出ることがやはり不可欠かと思えます。より楽しさを味わうためにはとこの頃つくづく思いました。国会も変なことが起つて本来の議事が進まず大変ですね。そんな中安倍サンは歴訪とか(ヨーロッパ)。白金葎に雨の恵みが沢山ありますように。三月十三日 長屋璃子

光成高志様

光 みち様

よろしくお願い致します。

(3.14 啓泰)

三月の句会で初めて佐藤宏之助氏にお会いした。聞けば氏は山口誓子の晩年から死去まで十六年間師事し、その後は茨木和生の「運河」に加わった。同じ誓子門下生の光成氏とは旧友であり、これからも白金葎の句会にも顔を出したいということで、わが白金葎がかくも優れた先達を連衆に迎えられるのはじつに喜ばしい。俳人の一方に先師への酬恩という気風があるが、佐藤氏はそれを受け継ぎ高幡不動尊にある誓子の句碑を師の墳墓として毎月参詣を欠かさないというから、律儀な人である。句会のあと旗亭で歓談したが、その席で氏が気恥ずかしげに「俳壇」誌を取り出した。見ればその誌上で佐藤氏が所属結社「運河」を背負つて他の

結社の実力俳人と同一季語での作句競詠をしている。俳句綜合誌のジャーナリストイックな特集で、他流試合のように各結社の代表選手を咬み合わせてお手前拝見という風雅からは遠い企画だが、それに出場を頼まれたのは氏が実力俳人として認められている証しであるにはちがいない。歓談はその競詠句をめぐって盛り上がった。春の季語に「亀が鳴く」というのがあるとは初めて知った。その季語での氏の作句は、たしか天明の浅間大噴火の溶岩原で亀が鳴くといわれているという句であった。じつに奇想天外な取り合わせの句で、私には登攀不可能の句想というほかなかった。「ほんとうに亀は鳴くの？」という声に続いて「みみずは？」という声も出た。もちろん鳴くのだと答えがあった。発声器官のない亀が果たして鳴くだろうか？ 交尾の頂点で鳴くのだと尤もらしく断定する声。おなじ爬虫類ということで、私はいつかテレビで見た毒蛇ハブの深夜の交尾場面を思い出した。それはライトアップのなか、真っ白な二匹の蛇体が絡み合ったまま舞うように地面から宙に立ち上がる蠱惑の極致というべき光景だった。しかし終始無言で演じられた。周知のように亀は産卵のとき涙を流すが、はたして亀は鳴くだろうか。ついに結論は出なかった。季語「踏青」の句は知恵遅れの少女との野遊びを詠んだものだったが、弱者

への憐憫に満ち作者が情の人であることを示すものであった。一読して蕪村の「愁いつつ岡にのぼれば花いばら」に通じる感傷と哀愁とを感じさせるいい句と思った。(以下略)

(3.19 磯目健二)

先日の句会はお世話になりました。毎回帰りの車に乗せていただき、お心配り恐縮です。コピアンでの歓談も楽しいかぎりでした。花ざかり目前、ご夫妻共々、御身お大事にご健吟下さい。

(3.21 孝三)

我孫子日記

2/17	例会
2/22	SOA
2/26	木下
*	北総病院
*2	3/7
	3/8
	SOA
	3/9
*3	寸又峡
	3/10
*4	金谷
	3/12
	シネマ
	3/14
*5	感応寺
	3/15
	SOA
	3/17
	例会

\*直角の機械畦塗りてらくと

高志

春光や化粧廻しの横綱碑

みち

\*2 休み畑覆ふ紫仏の座

高志

\*3 杉花粉絵山杉山七曲り

みち

春塵の立つ河川敷大井川

みち

SLにハモニカ流れ春の風

高志

\*4 日蓮の涅槃合掌し給へり

高志

日蓮の涅槃図武士も誦経せる

高志

春日をきらきら返す茶畝哉

高志

いぬふぐり東海道の石畳

みち

\*5 涅槃図の余白を埋める蝶・百足

高志

象の鼻蓮華を捧ぐ涅槃絵図

高志

白木蓮名鐘高く感應寺

高志

編集後記

選句と鑑賞文がお願いした曜日通りに届けられましたので、水曜日に後記を打込めました。感謝致します。今月の白金葎は呆けてますます白髪のようにです。俳人の旗にふさわしいと思ひ本誌の名前にしています。来月ステント手術後、無事生還しましたら、俳誌として再出発の投稿依頼ハガキを投函するつもりです。俳友学友親友畏友三六通内俳人二〇名位です。おそらく数人しか句をいただける人はいないだろうと思ひますが、私としては一通過点ですから思い切つて行動します。皆さまにおかれましても、そういう知人がおられましたら、白金葎を紹介して下さいますようお願い致します。

白金葎3月号(73号)平成29年3月発行

編集・発行人 光成高志(〇四一七一八七一一〇六八)

発行所 270・119 我孫子市南新木2・14・17

表紙の題字…加納綾女。写真…3月22日の白金葎